

都城市文化財調査報告書 第114集

Tomiyoshihira Site

富吉平遺跡

—携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

序 文

本書は、平成 25 年度に携帯電話無線基地局建設に伴って発掘調査を実施した富吉平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。本書に所収いたしました富吉平遺跡は都城市の東部、山之口町富吉に所在しており、山之口地区において発掘調査が実施された数少ない遺跡の一つであります。今回の発掘調査では、弥生時代・中世の遺構・遺物が見つかっており、当該期の人々の生活の痕跡が見て取れる遺跡であります。

これら先人の残した文化財を守り引き継いでいくことは、私たち都城市民の責務でもあります。

本書を通して、こうした地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まる事を願いますとともに、今後の学術研究の資料として多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで事業者であるソフトバンクモバイル株式会社九州技術部様をはじめ、作業に従事していただいた市民の皆様、関係諸機関、個人に多大なるご理解・ご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

2015 年 3 月

都城市教育委員会

教育長 黒木 哲徳

例 言

1. 本書は、「携帯電話無線基地局建設」に伴い、平成 25 年度に実施した富吉平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同市文化財課主査加覧淳一、同主事原栄子が担当した。
3. 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は真北である。
4. 本書で使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 『山之口』を基に作成した。
5. 現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て加覧・原が行った。
6. 本書に掲載した遺構のトレースは株式会社 CUBIC の「トレースくん」並びに Adobe 社の「Illustrator CS3」を用いて原が行った。また、遺物の実測・トレースについても原が行った。
7. 遺構・遺物の写真撮影は加覧・原が行った。
8. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
9. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001 年度前期版を参考にした。
10. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、1/20 とした。遺物実測図は土器類及び石器類ともに 1/3 とした。
11. 本書の執筆・編集は原が行った。
12. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。
13. 出土土器の分類・報告に際して、下記文献を参考とした。

藤尾慎一郎 1993 「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第 27 号 鹿児島県考古学会

山本信夫編 2000 『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府の文化財 第 49 集 太宰府市教育委員会

栗畑光博 2004 「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』第 19 集 宮崎考古学会

2006 「東南部九州における縄文から弥生への土器変遷」『大河』第 8 号 大河同人

目次

本文目次

第1章 序説・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1	第2節 富吉平遺跡の基本層序・・・・・・・・	6
第1節 調査の経緯と経過・・・・・・・・	1	第3節 検出遺構・・・・・・・・・・・・・・	8
第2節 調査組織・・・・・・・・・・・・・・	1	第4節 包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・	8
第2章 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・	2	(1) 土器・石器・・・・・・・・・・・・・・	8
第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・	2	(2) 土師器・陶磁器・・・・・・・・・・・・	9
第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・	2	第4章 調査のまとめ・・・・・・・・・・・・	12
第3章 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・	5	写真図版・・・・・・・・・・・・・・	13
第1節 調査の方法と概要・・・・・・・・	5	報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・	15

挿図目次

第1図 富吉平遺跡と周辺の遺跡位置図・・	3	第5図 IV層上面検出遺構配置図・・	8
第2図 調査地点位置図・・・・・・・・・・	5	第6図 ピット実測図・・・・・・・・・・・・	8
第3図 トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・	5	第7図 出土遺物実測図①・・・・・・・・	9
第4図 調査区土層断面図・・・・・・・・・・	7	第8図 出土遺物実測図②・・・・・・・・	10

挿表目次

第1表 富吉平遺跡周辺遺跡一覧表・・	4	第3表 出土遺物観察表 (中世・近世)・・	11
第2表 出土土器観察表 (縄文・弥生時代)・・	11		

図版目次

写真図版1・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13	写真図版2・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14
-------------------------	----	-------------------------	----

第1章 序説

第1節 調査の経緯と経過

都城市山之口町富吉字平 2168 番地 2 において、ソフトバンクモバイル株式会社による携帯電話無線基地局建設を目的とする計画があり、それに伴い、平成 24 年 4 月 18 日に有限会社ジーアイエス南九州乗峯和英氏から文化財所在の有無について照会がなされた。これを受け、対象地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」であることから、平成 24 年 7 月 30 日に都城市教育委員会が事業予定地の確認調査を実施した。確認調査では携帯鉄塔建設予定地に 2×2 (m) のトレンチを設定した。調査を行った結果、事業対象地に縄文～弥生時代、中世の遺跡が遺存していることが判明した。

この確認調査の結果を受けて、有限会社ジーアイエス南九州と同市教育委員会で協議を行い、本工事により影響があると考えられる 64 m²については、事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

平成 25 年 5 月 15 日には本工事の事業主体であるソフトバンクモバイル株式会社九州技術部より文化財保護法 93 条第 1 項に基づく発掘届出が提出された。この後、平成 25 年 7 月 1 日付けでソフトバンクモバイル株式会社と都城市との間で「富吉平遺跡に関する協定書」を締結した。このことにより、対象地点の本発掘調査を平成 25 年 7 月に実施し、報告書作成は翌平成 26 年度に実施することが取り決められ、発掘調査・報告書作成に係る費用はソフトバンクモバイル株式会社九州技術部が負担することも併せて取り決められた。同日付けで富吉平遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託契約も締結され、現地での発掘調査へ移行することとなった。

現場での発掘調査は平成 25 年 7 月 23 日から平成 25 年 8 月 6 日まで行い、それに並行して出土遺物の水洗・注記・接合作業を都城市文化財課で行った。出土遺物の実測作業は現場での調査終了後から行い、報告書の執筆・編集作業は主に平成 26 年度に実施した。

第2節 調査組織

平成 25 年度の組織（発掘調査実施年度）

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査責任者 教育長 酒匂 醸以（平成 26 年 2 月 24 日まで）
黒木 哲徳（平成 26 年 2 月 25 日から）
- ・調査事務局 教育部長 池田 文明
文化財課長 新宮 高弘
文化財副課長 松下 述之
文化財課主幹 栗畑 光博
- ・調査担当者 文化財課主査 加覧 淳一
文化財課主事 原 栄子
- ・庶務 文化財課嘱託 松村 美穂
- ・発掘調査従事者 今村まさ子、今村ミツ子、奥 利治、高橋露子、竹中美代子、福重光男、馬籠恵子、森山タツ子
- ・整理作業従事者 免田友香理

平成 26 年度の組織（報告書刊行年度）

- ・調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・調査責任者 教育長 黒木 哲徳
- ・調査事務局 教育部長 児玉 貞雄
文化財課長 新宮 高弘
文化財副課長 松下 述之
文化財課主幹 栗畑 光博

- ・調査担当者 文化財課主事 原 栄子
- ・庶務 文化財課嘱託 松村 美穂（平成26年4月まで）・畑中 夏奈（平成26年6月から）
- ・整理作業従事者 奥 登根子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図・第2図）

富吉平遺跡は宮崎県都城市山之口町富吉に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央を占める。平成18年1月1日には高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡4町との合併により、新都城市が誕生した。この合併に伴って人口は17万人を超え、市域は約650km²に及び、人口規模は南九州第3の都市となる。

都城市が位置する都城盆地は、東半部に東岳・柳岳を主峰とする山地、北西に高千穂峰をはじめとする霧島火山群があり、東と西を山地に囲まれた広大な地溝状の凹地を呈している。盆地の中央を南から北に向かって大淀川が流れているが、盆地の地形は大淀川を挟んで東側には扇状地地形、西側にはシラス台地が広がっている。

遺跡の所在する山之口地区（旧北諸県郡山之口町）は都城盆地の北東部にあり、北側に宮崎市高岡町、南側に三股町、東側に宮崎市田野町と境を接する。西側から南側にかけて平地が開けており、北側から東側にかけては鰐塚山系を眺める。地形については、東縁山地と盆地底の大きく2つに区分される。東縁山地は起伏量・谷密度・傾斜度から、東岳一柳岳山地と青井岳一谷山地に区分されるが、後者の起伏量は小さく、西縁は山麓地状を呈しており、盆地底に孤立丘陵を数多く見ることができる。また、地区西部中央から南部において、大淀川支流の東岳川と花木川が西流し、花木川は富吉川と樋口川が合流している。これらの諸河川によって都城盆地東部における河岸段丘や開析扇状地を形成している。富吉平遺跡は、市域東部の山之口地区の南部、富吉川右岸の河岸段丘面に位置しており、標高は約150mである。東側約600mには富吉小学校、さらに東側に野神社が所在している。

第2節 歴史的環境（第1図）

富吉平遺跡が所在する山之口地区（旧北諸県郡山之口町）は、平成20年度に遺跡分布図作成のための分布調査が実施され、遺跡分布図が刊行された。これまで本格的な発掘調査が実施されているのは、平成4年度に山之口町教育委員会が調査した三俣（松尾）城、宮崎県埋蔵文化財センターによる平成15年度の三俣（松尾）城北東曲輪跡と平成23年度の富吉前田遺跡、都城市教育委員会による平成20年度の萩ヶ久保第1遺跡と平成24年度の王子山遺跡の計5遺跡である。ここでは本遺跡周辺における歴史的環境について触れておく。

平成20年度に実施された山之口地区の遺跡詳細分布調査によって、山之口地区では133の遺跡が確認されており、その中で富吉平遺跡の所在する大字富吉地区で確認された遺跡数は52にのぼる。

山之口地区の縄文時代の遺跡は、**王子山遺跡**で縄文時代草創期の堅穴状遺構や炉穴・集石遺構や土器など草創期における定住生活を物語る各種遺構・遺物、炭化植物類も多数出土した。また、後期旧石器時代の石器も出土しており、これまで調査例が少なかった都城における旧石器から初期縄文文化の様相を考える上できわめて重要な資料となった。都城盆地においては一般的に縄文時代早期の遺物は上位に堆積するテフラによって厚く覆われているため、現地表面に露出している可能性は低い。**萩ヶ久保第1遺跡**では、縄文時代早期の集石遺構19基、中期の陥し穴状遺構が6基検出されている。陥し穴状遺構については遺物の出土は確認されていないものの、逆茂木跡の有無や検出面の差から、御池軽石降下直前期とそれ以前のものに分類されている。出土遺物については縄文時代早期前葉の土器を中心に出土している。**新開遺跡**や**二本杉遺跡**は切り通しの土層断面において、鬼界アカホヤ火山灰下位から土器片が採集された。

弥生時代の遺跡については、遺跡は多く点在しているものの発掘調査があまり行われておらず、採集資料として**峯元第1遺跡**の磨製石剣や、**中間遺跡**では弥生時代中期の土器片の他に、磨製石鏃等の石器の素材となる剥片が多数散布していた。また、熊野神社の山頂に所在する**木上遺跡**では弥生時代の土器片が採集され、神社登り口の切り通しにおいて遺構と思われる落ち込みが確認されている。**富吉前田遺跡**では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての独立棟持柱を有



1. 富吉平遺跡 2. 山之口城跡 3. 中間遺跡 4. 峯元第1遺跡 5. 王子山遺跡 6. 三俣(松尾)城北東曲輪跡
 7. 三俣(松尾)城主郭部跡 8. 萩ヶ久保第1遺跡 9. 新開遺跡 10. 二本杉遺跡 11. 後田遺跡
 12. 山之口村古墳1・2号墳 13. 富吉前田遺跡 14. 木上遺跡

第1図 富吉平遺跡と周辺の遺跡位置図 (S=1/25,000)

した掘立柱建物跡と土坑など、集落の一角にあたる遺構群が検出された。

古墳時代については、昭和11年7月17日に『山之口村古墳』として9基の円墳と1基の地下式横穴墓が宮崎県の指定文化財に登録されていたが、現存するのは1号墳・2号墳のみである。本遺跡から約300mのところの所に在り、1号墳は直径7.2m、高さ1.0mを測り、墳頂平坦面はなく、小山状を呈する円形の墳丘である。最頂部の標高は約171.0mである。2号墳は1号墳の北東約2.2mに隣接しており、1号墳同様に小山状を呈する円形の墳丘である。直径5.2m、高さ0.75mを測り、最頂部の標高は約170.5mである。これら以外の古墳の大部分は大字花木地区に集中している。

古代(奈良・平安時代)においては、山之口地区内に日向国府と大隅国府とを結ぶ官道が通り、そのルート沿いに三俣駅が置かれていたのではないかと推定される。平安時代の官衙跡など拠点的な遺跡の可能性が考えられている通称「新町原」の後田遺跡一帯においては、平安時代の土師器や須恵器が多数散布していた。

中世については、旧山之口町教育委員会による三俣(松尾)城主郭部跡の発掘調査と宮崎県埋蔵文化財センターによる三俣(松尾)城北東曲輪跡の発掘調査が実施され、中世城郭内の遺構や遺物が検出されている。山之口城跡は大淀川の支流の小河川が合流する地点の東岸台地上にあり、二つの堀で台地を区切り三つの曲輪を作り出している。山之口城は、山下博明氏によって多量の貿易陶磁器や国産陶磁器等が採集されている。

近世については、山之口は鹿児島藩本藩の直轄領となり、地頭仮屋が置かれていたとされる。また、中世以降、青井岳天神領を地域境(東を山東、西を山西)とする地域区分概念があり、近世にも同所が鹿児島藩と飫肥藩という2つの藩の境界に位置づけられたという関係もあり、大字山之口には境目に置かれた番所跡が各地に所在している。

【参考文献】

都城市教育委員会 2009『都城市山之口地区(旧北諸県郡山之口町)遺跡詳細分布調査報告書』都城市文化財調査報告書 第94集
 都城市教育委員会 2010『萩ヶ久保第1遺跡』都城市文化財調査報告書 第97集
 都城市教育委員会 2012『王子山遺跡』都城市文化財調査報告書 第107集
 都城市史編さん委員会(編) 2005『都城市史 通史編 中世・近世』都城市
 都城市史編さん委員会(編) 2006『都城市史 資料編考古』都城市
 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『三俣城北東曲輪跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第97集
 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『富吉前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第209集

第1表 富吉平遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	概要
1	富吉平遺跡	山之口町大字富吉字平	散布地	縄文・弥生・古代・中世・近世	縄文土器・弥生土器・土師器・白磁・青磁・磨石
2	山之口城跡	山之口町大字山之口字大門	城館跡	縄文・弥生・古代・中世・近世	縄文土器・貿易陶磁器・国産陶磁器
3	中間遺跡	山之口町大字山之口字中間ほか	散布地	縄文・弥生・古代・中世・近世	縄文土器
4	峯元第1遺跡	山之口町大字花木字峯元、佐土原	散布地	縄文・弥生・古代・中世・近世	磨製石剣
5	王子山遺跡	山之口町大字花木字王子山、向原、佐土原	城館跡・散布地	縄文・古墳・中世・近世	細石刃核・剥片尖頭器・縄文土器・石器・炭化植物遺体
6	三俣(松尾)城北東曲輪跡	山之口町大字花木字山ノ田、百地	城郭跡	縄文・中世	縄文土器・土師器・輸入陶磁器
7	三俣(松尾)城主郭部跡	山之口町大字花木字門田、油田、山ノ田	城郭跡	中世	土師器・陶磁器
8	萩ヶ久保第1遺跡	山之口町大字富吉字萩ヶ久保	集落跡	縄文・中世	縄文土器・石鏃・石斧・土師器・韃羽口
9	新開遺跡	山之口町大字富吉字新開	集落跡	縄文	縄文土器
10	二本杉遺跡	山之口町大字富吉字二本杉、山田	散布地	縄文・弥生・近世	縄文土器
11・12	後田遺跡(山之口村古墳1・2号墳)	山之口町大字富吉字後田、二本杉	古墳・散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	土師器・須恵器・緑釉陶器
13	富吉前田遺跡	山之口町大字富吉字前田	散布地	弥生・古代・中世・近世	弥生土器・土師器・須恵器・白磁・青磁・青花・石製品・鉄製品
14	木上遺跡	山之口町大字富吉字木上	散布地	弥生・古代・中世・近世	弥生土器



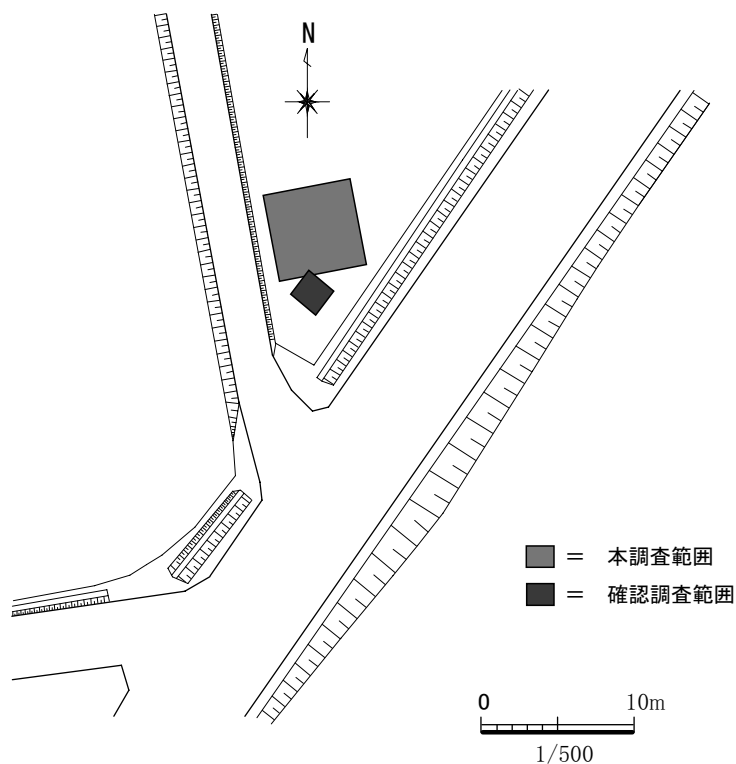
第2図 調査地点位置図 (S=1/10,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と概要

調査対象地は山之口町富吉、富吉川右岸の河岸段丘上に位置しており、調査前の状況は畑である。工事計画によれば、調査対象地に携帯電話無線基地局を建てるというものであった。事前の確認調査により、遺跡が遺存している範囲で工事により遺跡に影響がある約 64 m²について発掘調査を実施した。調査区の設定にあたっては、携帯電話無線基地局の基礎工部分をトレンチとして設定した(第3図)。本遺跡調査区は狭小であったためグリッドの設定は行っていない。

発掘調査はまず、7月24日に重機による表土(I層)剥ぎを行った。事前に実施した確認調査では、遺構・遺物が確認されるのは地表下約0.3m以下にわずかに残存するII層から中世の土師器が出土していたため、表土のみ剥ぎ取りを行い、II層以下遺物包含層の掘り下げは人力によって行った。出土遺物についてはトータルステーションによって座標位置を記録した後取り上げを行い、遺構精査および検出はV層上面にて行った。検出後は適宜実測および写真撮影等の記録保存



第3図 トレンチ配置図 (S=1/500)

の措置を講じた。調査終了後は調査区の埋め戻しを行い、すべての調査工程を終了した。

調査の結果、遺構についてはピット 3 基が検出された。出土遺物は縄文土器（後期）、弥生土器、中世の土師器・青磁等が確認された。

本調査の報告書の作成は主に翌平成 26 年度に実施し、ピックアップした遺物の実測を行い、その後トレース・版下作成の工程を経て報告書刊行の運びとなった。

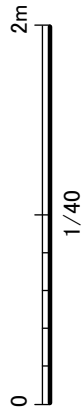
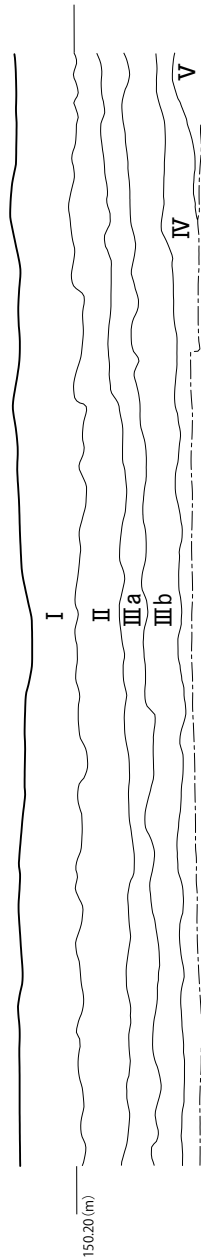
第 2 節 富吉平遺跡の基本層序（第 4 図）

本遺跡の現況は畑であり、表土以下基本土層はゴボウの植え付けによる攪乱が著しく、Ⅱ～Ⅴ層上面まで大きく攪乱の影響を受けていた。土層断面については、調査区西側は攪乱による影響がなかったため、西壁の実測を行った。

調査区における各基本土層については以下の通りである。事前に行われた確認調査成果及び調査区西側の土層堆積状況を基準にして設定した。

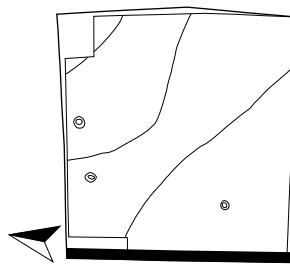
- I 層 : 褐灰色土（表土 現耕作土で、5mm 以下の白色軽石、黄白色軽石を含む）
- II 層 : 黒褐色シルト土（5 mm 以下の黄色軽石を含む）
- III a 層 : 暗褐色シルト土（5 mm 以下の黄色軽石をまんべんなく含む）
- III b 層 : 黒色シルト土（1 cm 以下の黄色軽石をⅢa 層より多く含む）
- IV 層 : 黒色シルト土（1 cm 以下の黄色軽石を大量に含む。霧島御池軽石漸移層）
- V 層 : 黄色軽石（「霧島御池軽石（Kr-M）」約 4,200 年前）
- VI 層 : 黒色粘質シルト土

I 層は表土層で、白色軽石や黄白色軽石を含んだ現耕作土である。II 層はシルト質の黒褐色土層で黄色軽石を含む。遺物包含層で弥生土器も一部出土しているが、確認調査では中世の土師器が出土しており、中世の堆積層である可能性が高い。III 層は黄色軽石の含有量の違いから 2 つに分層できた。III a 層は黄色軽石をまんべんなく含み、III b 層は III a 層よりさらに多くの黄色軽石を含む。III 層も II 層同様遺物包含層であり、縄文～弥生土器、一部落ち込みと考えられる中世の土師器の出土が確認された。IV 層はシルト質の黒色土層であり、黄色軽石を大量に含んでいることから下層霧島御池軽石層の漸移層であると考えられ、遺構検出面である。V 層は約 4,200 年前の霧島御池軽石層である。本調査においては V 層上面までで調査は終了しているが、確認調査時に V 層以下の掘り下げを行ったところ、V 層は約 0.9m の層厚が確認された。VI 層については粘質のある黒色シルト土で、遺構・遺物等は検出されていない。掘り下げを行った結果、地表下約 2m で地下水が湧き出したため、その高さで確認調査を終了している。



【基本層序】

- I 層 褐灰色土 (表土 現耕作土であり、5 mm以下の白色軽石及び黄白色軽石を含む)
- II 層 黒褐色シルト土 (5 mm以下の黄色軽石を少量含む)
- IIIa層 暗褐色シルト土 (5 mm以下の黄色軽石をまんべんなく含む)
- IIIb層 黒色シルト土 (1 cm以下の黄色軽石をIIIa層より多く含む)
- IV 層 黒色シルト土 (1 cm以下の黄色軽石を大量に含む 霧島御池軽石漸移層)
- V 層 黄色軽石 (「霧島御池軽石」 約4, 200年前)

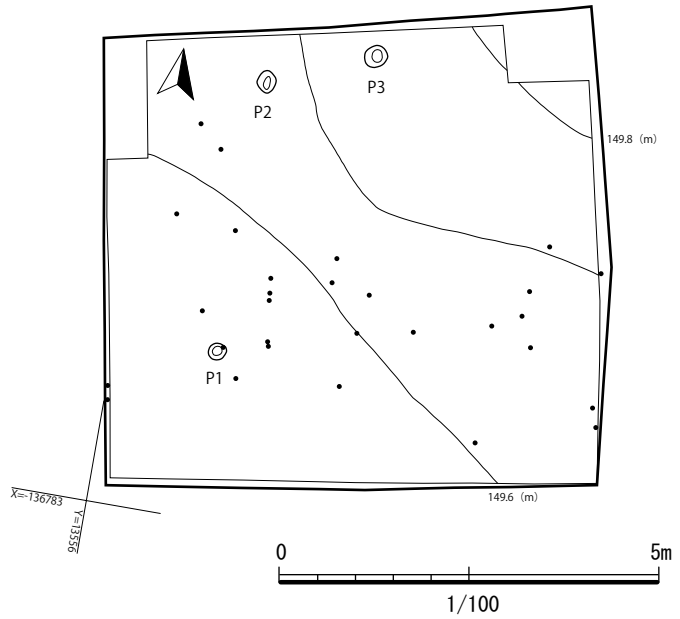


第4図 調査区土層断面図 (S=1/40)

第3節 検出遺構 (第5図・第6図)

調査で検出された遺構としては、ピットが3基のみであった。

P1は直径約23cm、深さ約16cmを測る。埋土は一樣で、黒色シルト土で5mm以下の黄色軽石をわずかに含んだ軟質土である。P2は直径約24cm、深さ約20cm、P3は直径約30cm、深さ約20cmを測る。P2とP3の埋土は同様で黒色シルト土であり、P1より黄色軽石を多く含む土である。P2とP3との間隔は1.5m程で深さ・遺構内埋土も類似していることから、調査区以北に続く建物跡の可能性も考えられる。



第5図 IV層上面検出遺構配置図 (S=1/100)

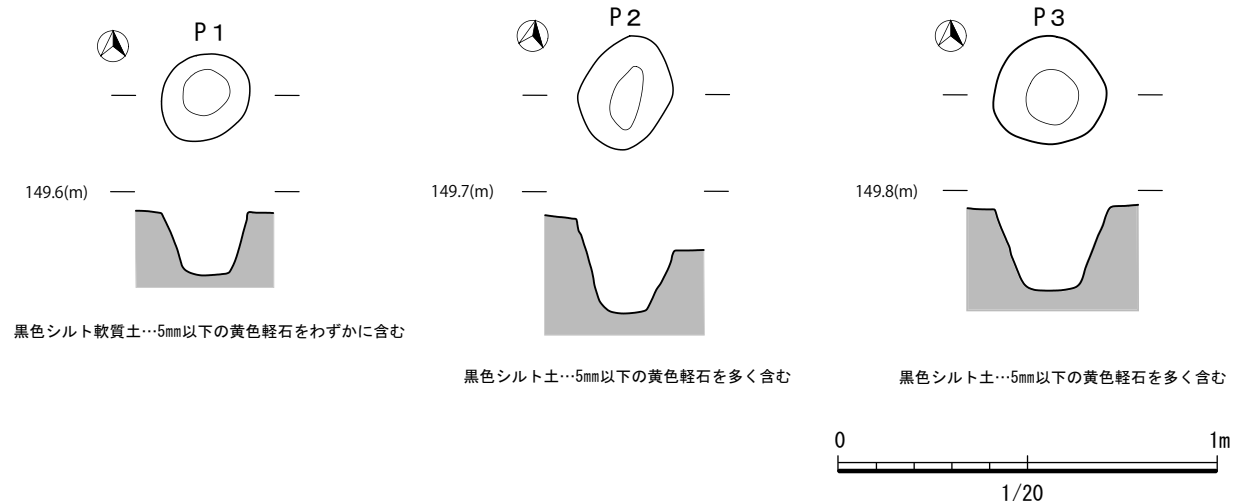
第4節 包含層出土遺物

本調査区では、主に弥生時代前期の土器と中世の土師器及び陶磁器が出土している。本調査において石器の出土は確認されず、確認調査で1点のみ出土した磨石を掲載した。

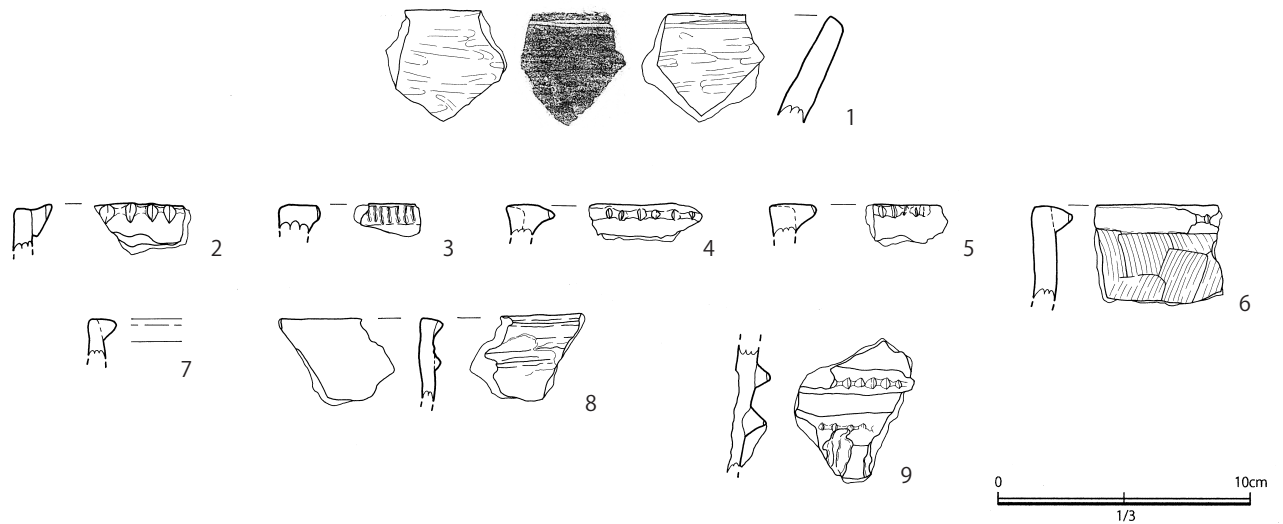
(1) 土器・石器 (第7図・第8図)

1は、縄文時代後期に比定される深鉢形土器の口縁部である。口縁が外傾する器形で、内外面ともにミガキによる器面調整が行われている。特に口縁部内面では沈線を意識したようなくっきりとしたミガキ調整が認められる。口唇部は平坦に面取りされている。胎土の特徴としてキンウンモ・軽石が多く含まれている。

2~13は概ね弥生時代前期後半~中期初頭に比定される甕形土器である。2~8は甕の口縁部片で口縁部に突帯を巡らしており、突帯には刻目を施すものと施さないものがある。口縁部から胴部に至る土器が出土していないことから器形については不明確である。2・3は口縁部に並行して突帯が付されており、2は太い棒状工具による大きく深い刻目を、3は鋭利な工具による細かく浅い刻目を施している。器面調整は内外面ともにナデ調整である。4・5も口縁部に並行して断面三角状の突帯が付されている土器で、工具による細かい刻目が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整であり、胎土には弥生時代中期によくみられる粗い砂粒が多く含まれている。6は口縁端部に並行に断面三角状の突帯が付されており、工具による細かい刻目が施されている。突帯はほとんどが剥落しているが4・5と類似する。器面



第6図 ピット実測図 (S=1/20)



第7図 出土遺物実測図① (S = 1/3)

調整は外面がハケメ調整、内面は丁寧なナデ調整であり、顕著なハケメ調整が認められるのは6のみである。7・8は突帯に刻目が施されていない口縁部片である。7は小型の甕形土器の口縁部片と考えられるが、小片のため詳細は不明である。8は口縁端部と直下に2条の突帯を巡らした土器である。9～13は胴部片である。9は刻目突帯が2条付されており、さらに刻目突帯の下には粘土紐が縦位に付される。器面調整は内外面ともにナデ調整であるが、外面は一部ミガキ調整が行われており、内面はほぼ剥落している。10の外面は荒いミガキによる調整が行われており、全体的にススの付着が認められる。11・12は1条の突帯、13は2条の突帯が付されており、刻目は施されていない。12の器面調整は内外面ともにナデ調整であるが、外面には部分的にハケメが認められ、ハケメ後ナデ調整を行っている。

14～17は壺形土器である。14・15は口縁部片で、15の外面は一部ミガキ調整を行っている。16・17は胴部片である。16はミガキにより精製された壺で、胴部上半にヘラ描きによる沈線が3条施されている。17は幅広の突帯にヘラ描きによる斜格子文が施されており、器面調整は内外面ともにナデ調整であるが外面は一部ミガキが行われている。

18～20は鉢形土器と考えられる口縁部片であるが、小片のため甕の可能性も考えられる。18は2条の突帯を付している。19も口縁部に突帯を付しており、口唇部は面取りを行っている。器面調整は内外面ともに粗いミガキである。20の口唇部はヨコナデにより凹んでいる。

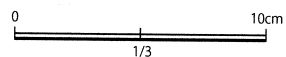
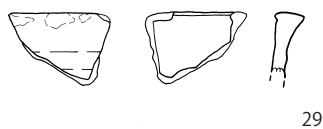
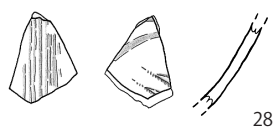
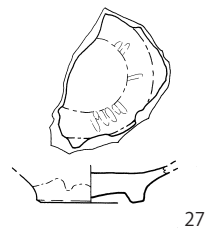
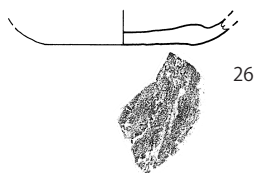
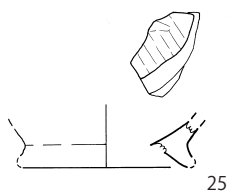
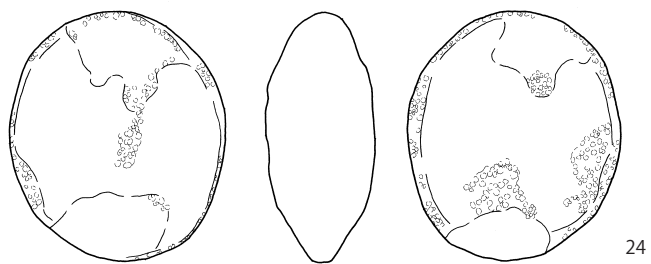
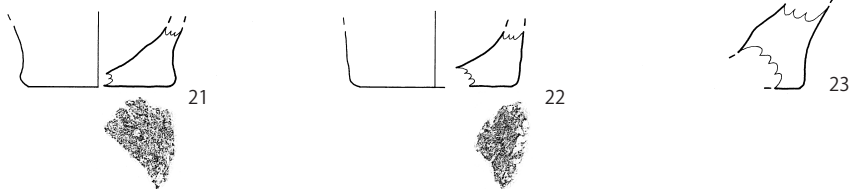
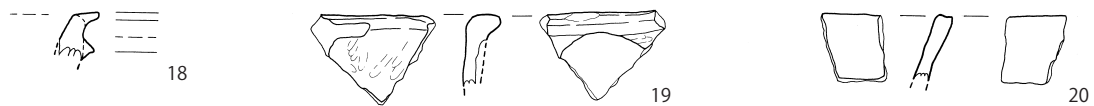
21～23は底部片である。21は底径6.0cmを測り、内外面の器面調整はナデ調整であるが、外面は剥落が激しく詳細は不明である。土器の色調は褐色を呈している。22は底径6.7cmを測り、内外面ともにミガキによる調整が行われている。21に比べて赤みの強い赤褐色を呈している。21・22については胎土に軽石が含まれている。23は中実脚台である。胎土には荒い砂粒が含まれており、色調は橙色を呈する。

24は磨石である。確認調査で出土したもので、石材は砂岩である。長さ9.9cm、幅8.45cm、厚さ約4.3cm、重さ556gを測り、側面や端部に敲打痕が認められる。

(2) 土師器・陶磁器 (第8図)

25・26は土師器である。25はミガキ調整を行っている高台付碗で底径6.2cmを測る。低い高台を持ち、外側に開く。底部のみの出土のため全体的な器形は不明である。26は坏で底径6.2cmを測る。器面は内外面ともに回転ナデによる調整であり、底部切り離しはヘラ切りである。

27・28は貿易陶磁器である。27は白磁皿の底部片で、底径4.3cmを測る。体部外面下半から高台内面まで露胎し、見込みの釉を輪状に掻き取っている。また、掻き取る際についたと考えられる工具痕も認められる。28は同安窯系青磁碗で、体部の外面に細かい縦の櫛目文、内面に櫛によるジグザグ状の点描文を施している。29は近世の苗代川系薩摩焼きの口縁部片で、口縁部から胴部まで施釉している。



第8图 出土遺物実測図② (S=1/3)

第2表 出土土器観察表（縄文・弥生時代）

図版No.	遺物No.	器種	部位	層	文様・調整		色調		胎土					備考	
					外	内	外	内	石英	長石	角	軽石	赤粒		その他
第7図	1	深鉢形土器	口縁部	I(表土)	ミガキ	ミガキ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)		○	○	○		金雲母・白粒	口唇部面取り
"	2	甕形土器	口縁部	III	ナデ	ナデ	灰褐(7.5YR4/2)	明赤褐(5YR5/6)	○	○		○		白粒	
"	3	甕形土器	口縁部	III	ナデ	ナデ	黒褐(7.5YR3/1)	橙(7.5YR6/6)		○	○			砂粒	
"	4	甕形土器	口縁部	I(表土)	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)		○			○	砂粒	
"	5	甕形土器	口縁部	I~IV層一括	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	○	○				砂粒	
"	6	甕形土器	口縁部	I(表土)	ハケメ	ていねいなナデ	にぶい黄橙(10YR4/3)	橙(5YR6/6)		○	○		○	砂粒	
"	7	小型甕形土器	口縁部	II	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい褐(7.5YR5/3)		○	○			砂粒	
"	8	甕形土器	口縁部	II	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	○	○	○			白粒	
"	9	甕形土器	胴部	I(表土)	ナデ(部分的にミガキ)	ナデ	褐(7.5YR4/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	○	○	○		○		内面剥落
第8図	10	甕形土器	胴部	II	荒いミガキ	ナデ	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	○	○	○		○		外面スス附着
"	11	甕形土器	胴部	II	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	○	○	○		○	白粒	
"	12	甕形土器	胴部	III	ハケメ→ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	○	○	○		○	白粒	
"	13	甕形土器	胴部	I(表土)	ナデ・ミガキ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)		○	○			砂粒	
"	14	甕形土器	口縁部	I~III層一括	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(5YR5/6)	○	○	○		○	白粒	
"	15	甕形土器	口縁部	III	ナデ・ミガキ	ナデ	橙(5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	○	○	○		○		
"	16	甕形土器	胴部?	I~III層一括	沈線・ミガキ	ミガキ	灰褐(7.5YR4/2)	にぶい橙(7.5YR7/4)		○				黒色鉱物・白粒	遠賀川系壺
"	17	甕形土器	胴部	III	格子文・ミガキ→ナデ	ナデ	褐灰(10YR4/1)	浅黄橙(7.5YR8/4)		○			○		遠賀川系壺
"	18	鉢形土器	口縁部	I~IV層一括	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○	○		○		
"	19	鉢形土器	口縁部	I(表土)	ミガキ	ミガキ	黒褐(10YR3/1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	○	○	○	○			口唇部面取り
"	20	鉢形土器	口縁部	III	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/3)	○	○	○			砂粒	口唇部凹み
"	21	甕形土器	底部	III	ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	灰褐(7.5YR4/2)	○	○	○	○		砂粒	底径6.0cm
"	22	甕形土器	底部	II	ミガキ	ミガキ	明赤褐(2.5YR5/6)	黒褐(10YR3/1)	○	○	○	○			底径6.7cm
"	23	甕形土器	底部	I~III層一括	ナデ	ナデ?	橙(2.5YR6/8)	橙(5YR6/8)		○				黒色鉱物・砂粒	

第3表 出土遺物観察表（中世・近世）

図版No.	遺物No.	種別	器種	部位	層	法量(cm)		文様・調整		胎土の色調		釉の色調	胎土	備考
						口径	底径	外	内	外	内			
第8図	25	土師器	高台付椀	底部	I~IV層一括	—	6.2	回転ナデ	ミガキ	浅黄橙(10YR8/3)	灰白(2.5Y7/1)	—	1cm以下の長石・黒色粒子	反転復元
"	26	土師器	坏	底部	III	—	6.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙(10YR7/2)	浅黄橙(7.5YR8/4)	—	1cm以下の長石・黒色粒子	へら切り 反転復元
"	27	白磁	椀	底部	I(表土)	—	4.3	施釉	施釉・見込み輪状に輪割ぎ	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	精緻	貫入・高台～高台内面露胎・釉剥ぎ部分に工具痕有り
"	28	同安窯系青磁	椀	体部	I(表土)	—	—	縦の櫛目文 施釉	略化した花文・点線文 施釉	灰白(N8/)	灰白(N8/)	浅黄(7.5Y7/3)	微細黒色粒子	同安窯系青磁椀 I-b類
"	29	国産陶器	鉢	口縁部	I(表土)	—	—	施釉	施釉	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	黒褐(5YR3/1)	長石・黒色粒・白色粒	苗代川系薩摩焼

第4章 調査のまとめ

富吉平遺跡の発掘調査の結果、検出遺構はピットのみであったが、出土遺物については弥生時代前期末に比定される土器が比較的まとまって出土した。調査区が狭小であったことに加えて、V層御池降下軽石層上面までゴボウトレンチャーによる削平を受けており、遺物もかなりの影響を受けていたことから遺跡の全容は不明であるが、この地域に当該期の遺跡が存在することが明らかとなった。以下、今回の調査で出土した遺物について簡単にまとめておきたい。

まず、1は縄文時代後期に位置づけられる中岳Ⅱ式系の無文土器であると考えられるが、表土から出土しており、この他に後期土器が出土していないため、詳細については不明である。

次に弥生時代前期の甕形土器について見てみると、口縁部～胴部に至るまでの土器が出土していないため器形の詳細は不明確であるが、屈曲する胴部片は出土しておらず、砲弾型の器形を持つ土器が多いと考えられる。突帯文については刻目を施すものと施さないものが出土しており、刻目を施しているものはすべて工具による細かい刻目であった。器面調整はナデ調整が多く、二次調整としてミガキを行っているものが見られる。6のように外面に明瞭なハケメが認められる土器の出土は、今回の調査ではこの1点のみであった。ハケメ調整が明瞭な土器は、市内では大岩田町黒土遺跡や南横市町坂元B遺跡、高崎町今村遺跡等で出土しており、弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられる。13は、中期初頭～前半に位置づけられる土器である。今回出土した土器の中では最も新しい時期のものであると考えられる。壺形土器については、前期後半の遠賀川式系土器の壺が出土している。今回まとまって出土した弥生前期末～中期初頭における土器が出土している遺跡としては、上記した黒土遺跡・今村遺跡の他に、大岩田町大岩田村ノ前遺跡、横市町肱穴遺跡、南横市町加治屋B遺跡など市西部の遺跡が多く見られるが、山之口地区では発掘調査件数が少ないこともあり、現在確認している出土遺跡は本遺跡のみである。

中世から近世については、出土遺物のほとんどが表土からの出土であったことに加えて、本調査ではⅡ層から遺構・遺物ともに検出されなかった。しかし出土遺物を見ると、土師器はヘラ切りの坏と高台付碗（ミガキ碗）が1点ずつ出土した。また輸入磁器については、11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる大宰府分類の白磁皿Ⅲ類に比定される底部片が1点、12世紀中頃～後半に位置づけられる同安窯系青磁碗Ⅰ-b類に比定される胴部片が1点出土した。これらの遺物から出土点数はわずかであるが、調査区周辺に平安時代末～中世初頭（11世紀後半～12世紀代）の遺跡が残存しているといえる。

今回の調査では調査面積が狭小で遺構・遺物ともに数少ない出土となった。山之口地区では本発掘調査が実施された件数が少なく、弥生時代の本発掘調査も富吉前田遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭の調査が行われているのみである。そうした中で本地域の調査事例が一つ増えたことは、山之口地区における当該時期の遺跡の様相を捉える上で良い成果になったといえよう。

【引用・参考文献】

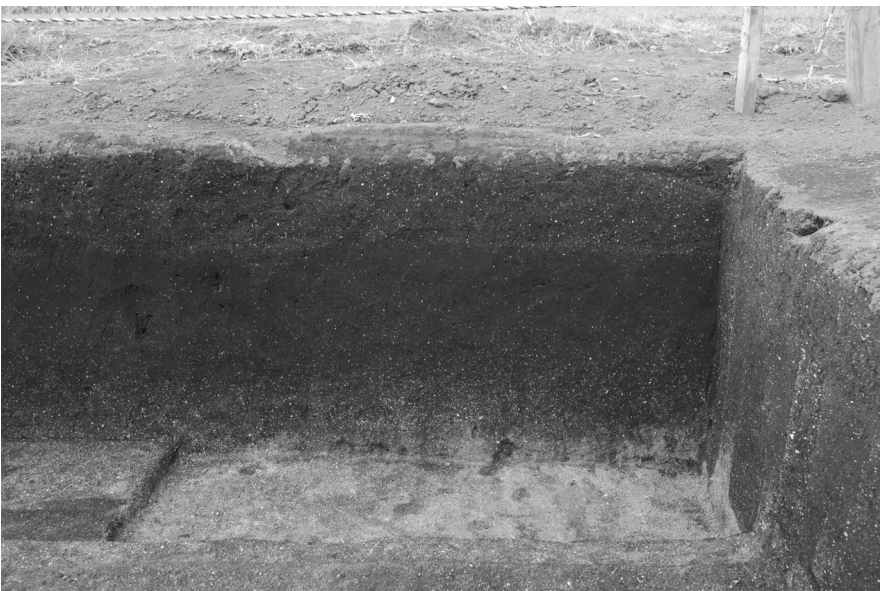
- 宮崎県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』
- 藤尾慎一郎 1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会
- 栗畑光博 2006「東南部九州における縄文から弥生への土器変遷」『大河』第8号 大河同人
- 都城市教育委員会 1991『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書第14集
- 都城市教育委員会 1994『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書第28集
- 都城市教育委員会 2011『永田藤束遺跡』都城市文化財調査報告書第102集



IV層上面遺構検出（北西から）

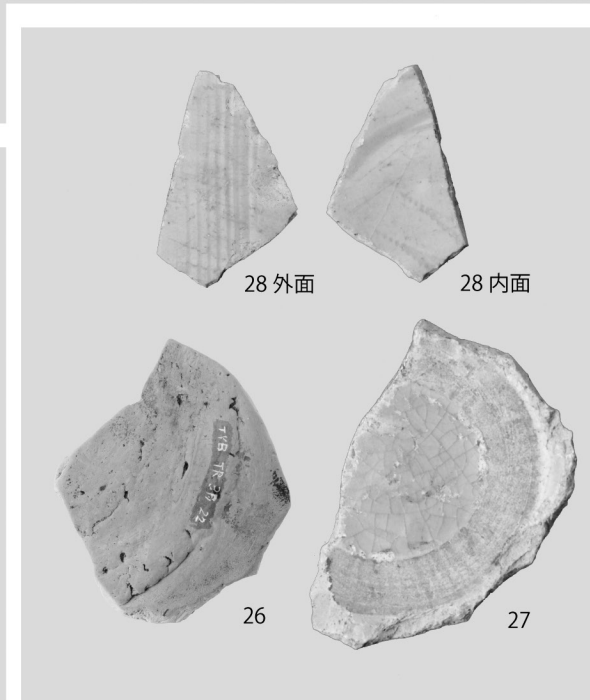
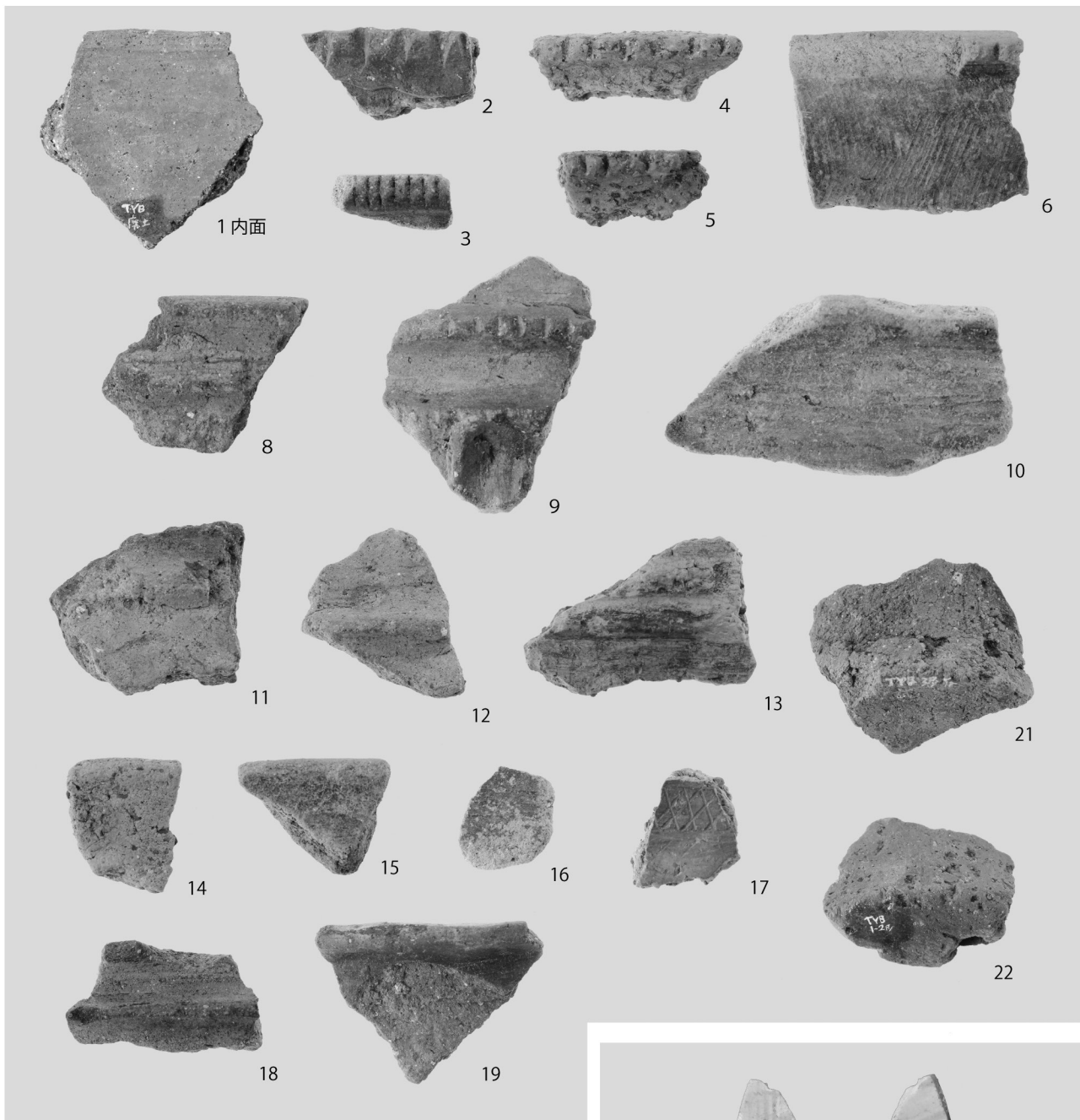


ピット完掘状況（南から）



調査区西壁土層

图版 2



報告書抄録

ふりがな	とみよしひらいせき							
書名	富吉平遺跡							
副書名	携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第114集							
編著者名	原 栄子							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2015年3月13日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とみよしひら 富吉平遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 やまのくちちょう 山之口町 とみよし 富吉	45202	YK43	31° 46' 01" 付近	131° 08' 36" 付近	2013.7.23 ～ 2013.8.6	64 m ²	携帯電話無線基地局建設
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
富吉平遺跡	散布地	弥生時代 古代 中世		柱穴		弥生土器 土師器		
要約	<p>富吉平遺跡は都城市山之口町富吉に所在する。携帯電話無線基地局建設に伴い、本発掘調査を実施した。</p> <p>遺跡は山之口町の南部、富吉川右岸の河岸段丘面に位置しており、標高約150mのところにいる。</p> <p>今回の発掘調査では、御池軽石層上位までを対象として調査を実施した。発掘調査の結果、調査区内は御池軽石層上位面までゴボウのトレンチャーによって削平されており、遺構・遺物ともに大きく影響を受けていたが、遺物については弥生時代前期の土器を中心に出土が確認された。</p> <p>調査の結果、遺構・遺物ともに少数であったが、弥生時代前期末～中期初頭を中心とした人々の生活の痕跡が窺えた。</p>							

都城市文化財調査報告書第114集

富吉平遺跡

—携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年3月13日

編 集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課

発 行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549

印 刷 株式会社 文昌堂
〒885-0004 宮崎県都城市都北町7166番地
TEL (0986) 36-6600 FAX (0986) 36-4660
